

389.23
Ts.78

泰國に於ける諸民族に就て
南洋經濟研究所編



* 0054948000 *

3

0054948-000

389.23-Ts78ウ

泰國に於ける諸民族に就て

常岡悟郎・著

南洋經濟研究所

昭和15

AIE

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

917

228

389.23

Ts 78

三

常岡悟郎著

泰國に於ける諸民族に就て

การชนาน ของ พระเชลยราช

南洋經濟研究所

序

發行所寄贈本

泰國は今や「タイ人のタイ國」を標榜して永年に亘る英佛兩國勢力の壓迫を排し、一大民族國家の建國に努力して居るが、同國は古くより亞細亞南東部諸民族の勢力交合點として常に民族的爭鬪の絶えなかつた所である。

本書の著者國學院大學國史學科學生常岡悟郎君は豫てより學生南洋研究聯合會幹事として我が青年學徒の南洋に對する關心昂揚に努力する傍、自ら泰國に於ける諸民族の研究に従事し來つたが、今回日頃の研鑽の一部を纏めて、此處に本論文を作成した。

本書は固より學術的に價値を問はるべきものではない。只著者の眞摯の研究を勞とし、更に本書の刊行により一般學生諸君の南洋に對する研究の昂揚に資せんがため、本研究所に於て之を刊行する事とした。敢て讀者諸賢の諒恕を請ふ次第である。

昭和十五年九月二十七日

南洋經濟研究所



はしがき

部分は全體より遊離するものにあらず。南洋の有つ文化の波動は心臓の鼓動と相合して直接間接に大アジア史の一部を構成する。勿論、我が國も亦その影響を蒙りたること大なりといふべく、殊に日本民族創造の一大要素として南方系諸民族を擧げざるべからず。

我等は建國こゝに二千六百年。漸くにして國家的背景を有する南方進出の聲を聞く。誠に壯なりといふべし。然れどもその進出は彼の西洋者流の我利／＼主義にあらずして、申すも畏し、八紘を一字となすのまこと、即ち皇道に則りたるものなり。

今や燦然たる日本文化の錦を着て、寶豊なる故郷、我がはらからに目見えんとす。亦、快ならずや。

日本は名實ともに大アジアの心臓なり。南洋は大陸と共に血液の補給地なり。この三者の渾然たる融合。かくてこそ新しきアジアの現實は生れ、さらに全世界の生命に及ばん。かく南洋の重要な、而るにその凡ゆる基本的研究就中文化部面の未だ不充分なるは眞に遺憾なりといふべし。

余、微力ながらこゝに思を致し、東京外國語學校泰語科に入學、佐藤致孝師の御熱心なる教鞭を

受け、泰國を中心とせる文化の究明に銳意努力中なり。今回その手初めとして、平常研究しありし泰國種族の分布に關し覺書を作成したるに、圖らずも、南洋經濟研究所理事長精谷宗一閣下を初め所員各位の一方ならぬ御援助により小冊子の刊行をみるに至れり。茲に謹んで深甚なる謝意を表する次第なり。

余、もとより薄學非才願くは諸賢の忌憚なき御鞭撻を賜はらんことを。

紀元二千六百年八月十日

南洋經濟研究所にて 常岡 悟郎

書 考 參 用 引

Siam vo. 1. W.A. Graham. 1924
 Siam: Nature and Industry 1930
 Ministry of Commerce and Communication
 シヤム篇(南洋叢書第四卷) 昭和十三年
 東亞經濟調査局
 Statistical year Book-Siam No.19 (1935-6-7)
 印度支那民族 昭和十年 松本信廣氏
 東洋思潮・東洋民族の部
 人類學
 人類學 地學叢書の内 鳥居龍藏氏
 人類學先史學講座卷五 小山榮三氏 1938
 民族移動史 ハッドン著 小山榮三氏譯
 改造文庫
 婦孺と離婚 Edward Westermarck 著 青山道夫氏譯
 改造文庫
 世界地理風俗大系 4 新光社發行
 世界地理 河出書房發行
 外南洋卷二
 新亞細亞、一卷十二・二卷一・三・四・五
 滿鐵發行月刊 布施雅爾氏

目 次

(一) 總 說 (1)
 (二) 各 論 (3)
 一、ネグリット族 (Negrito) (3)
 二、オーストロネシア族 (Austronesian) (5)
 三、モン・クメール族 (Mon-Khmer) (10)
 四、西藏ビルマ族 (Tibet-Burma) (21)
 五、タイ族 (Thai) (28)
 六、所屬未詳の種族 (43)

(一) 總 說

未だ充分な考古學的研究が行れてゐないためタイ國の原住人種がいかなるものであつたかは不明である。然しその地理的環境よりして同國が昔人種移動の十字路に當つたであらうことは想像される。然らばその知り得られる範圍の人種にはいかなるものがあるのか。第一にはオーストロネシア人種 Austroasiatic・第二にはモンクメール人種 Mon-Khmer・これに次ぐものに西藏ビルマ人種 Tibet-Burma・最後にタイ人種 Tai・以上の四波であつた。そして現在タイ國の根幹をなしてゐるのは言ふまでもなくタイ人種である。今、以上四波の經路を簡単に述べてみよう。

第一波——この人種の起源及進路は殆ど分つてゐないが恐らく後來のモンクメールに追はれて當地方に來り、その大半は東印度諸島に渡つたものらしい。

第二波——此古印度に住んでゐたがアリアン人種に逐はれて東進し、七世紀頃にはメーナム河流域・東方タイ一圓に覇を握つた。今では急速にタイ人種に吸収されつゝあり、その使用する獨特の言語も、タイ語の流布とともに漸次葬られゆくことであらう。

第三波——以上二波より遙かに遅れて南下し始めたもので、タイ國領内に移住したのは最近のことである。



第四波——發源地は恐らく南支那であらう。本人種の南下は非常に早くから行はれてゐたらしいが、その大量南移は南緬帝國滅亡以後である。十七世紀末葉強敵モンクメールの諸王を征服して北部及中部タイ國に確固たる地盤を築いたのである。これより彼等はいよ／＼積極的に先住土着種族を吸収して今日に至つた。タイ國が今日に於ても尙充分民族的に統一されてゐないのは、大陸の半島部に位するからであつて、今後もなにかと變動ある度毎に、種々の人種の到來をみることであらう。

二

(II) 各 論

一、ネグリート族 (Negrito)

(イ) スマン種族 (Semang)

名稱——泰國領内のある部族にはトンガ Tonga 若くはモス Mos と呼ばれるものがある。

居住地、他種族との關係——往昔、泰國土の大半を占據してゐたが、後來民族に逐はれて、現在チャイヤ Chaiya・スンゴラ Songkla・パタニ Patani 地方の奥地のみにな少數居る。本族はサカイ種族 Sakai (マライ語では召使の意) と總括的に呼ばれてゐるものと同族であると見なされてゐたが、調査の結果、全く別個の存在であつて、アングマン群島 Andamanislands・フィリッピン群島 Philippine Islands・ニューギニア島 New Guinea 及び中央アフリカの所謂黒奴などと人類學上同族と目せられるに至つた。従つてオーストラリアーネアンデルタール人 Australian-Neanderthal よりも以前・即ち人類進化の極く初期に屬するものと思はれる。

人口——グレアム Graham 氏は泰國領内に約六、〇〇〇人とみたが、泰國政府發行本 Siam, nature & industry には二〇〇——三〇〇位と見積つてゐる。

容貌——特異な點は髯倭小 (男子平均、一米二五種、女子平均、一米二三種) 皮膚はチヨコレー

三

ト色といふより寧ろ黒色、頭髮はちぎれて短く、目は水平で、口は大きく、額は廣くて圓味をおび、鼻は平たく、頬骨は突出してゐないことなどである。

生活

衣服——男子は筋だらけな木耳 (Fingert) で作られた細い腰巻、女子は植物纖維製の惡魔除けといはれる腰巻、病氣除けの木の櫛 (因にサカイ族 Sakai は櫛の紋様に種々の呪術的効驗を信じて護身用とする) は人目を惹くものである。文身については、よくは知られてゐないが、男女ともに時に顔面に施すことがあるといふ。

食——大部分は最も原始的な植物採取期にあるが、時には名ばかりの農耕——米、粟——を營むものがある。食物の料理は心得てゐる。火を得るには竹片二本を摩擦し或は火打石、金屬等用ひ、進んだものはマツチの使用法も分つてゐるやうだ。酒、阿片は飲まないが、煙草は喫ふ。

狩には細長い竹の槍と、サカイ族から招來されたと思はれる吹管 Blowpipe を用ひ、矢にはウバス Ubas (ジャバ及びその附近に産する無花科の毒樹) の汁及び Strychnos の樹皮屑などの毒を塗る。鉄は時に附近のマライ人・シヤム人から得た鐵で作られる。本族は實に獵に巧で、大は象小は小鳥に至る迄、この簡單な利器で射止める。

住——主に山地に漂泊生活をしてゐるため家らしきものを持たない。突出した岩下・木の洞など

は彼等に恰好の休息所となるが、椰子葉を利用して小舎を作る者もゐる。性質は至極内氣で、臆病で、猜疑心が強い。恐らく、他種族の多年に亘る壓迫が然らしめたものであらう。

言語——文字としてはモン、アンナン Mon-Annan 系統のものが少し残つてゐるだけ。その使用する言葉は多く附近のマライ人から借りたものである。

宗教——實に漠然としたもので、雷を司ると考へられてゐるカエ Kaye という神を祭る。又、天國などといふぼんやりした觀念もある様だが、要するに恐らく他の未開種族に於ける如く、精靈崇拜の域を脱しないものであらう。

音楽——音楽と之れに附随する舞踊、歌謡などは總べて最も原始的である。樂器としては鼻で吹く竹笛、椰子葉或は木の幹をつけた空な竹拍子、猿の骨で掻き鳴らす竹のハーブ Jew's harp などである。これらは歌垣・舞踊に於ける伴奏に用ひられるが、氣晴しといふ以外に音楽といふ程のものでない。又儀式との關係は不明である。

二、オーストロネシア族 (Austronesian)

(イ) マライ種族 (Malay)

居住地、他種族との關係——南方泰に於けるマライ人の發展は比較的新しいことである。即ちマラッカ Malacca からのマライ人の漂泊集團が半島の北部地方に侵入して先住民を壓迫し、そこに

植民地を作つたのは五〇〇年程前のことだ。勇敢な彼等の祖先は次第に四隣を抑へ、一方土着女子との雑婚によつて、暫くの間可成りの人口となつた。次にバクニマライ Pattani Malay と云ふのは、安南のチャム種族とも關係ある原始的山地住民ジャクン族 Jakun の支脈であるが、その地理的環境よりしてセマン種族の血を濃く享けてゐることは尤なことだ。猶、チャンプン Chantabun・アユチャ Ayuthia・バンコック Bangkok 附近及びシヤム灣東岸一帯にも、本族をみるが、これらは度々行れたマライ半島遠征の折の捕虜又は奴隷達の子孫である。

人口——泰國領内の者、約四五〇〇〇〇。

容貌——シヤム人によく似てゐる。褐色の顔、短軀、ほつそりしてはゐるが、しつかりした體格、短頭蓋、突出した顎、斜眼、眞直な黒い髪、平たい鼻、突出した頬骨、などの特徴がみられる。

生活

衣服——ゆつたりしたジャケツ、だぶだぶのスロース、立派なサロン、これらは南方マライ人の典型的な特色であるが、タイ國內のマライ人は裕福でない限りこんな服装はしてゐない。男子にあつては膝迄の腰巻、帯のやうなもの、それに小さな頭布など。女子にあつては腰から足首迄ある布腕下胸間から腰へびつたり身についた布、頭部、肩を被ふ布などがある。上流女子には回々教の戒律にも拘らず、腕、首筋を露にし肉線を現さうと工夫する者がゐる。男子は大底剃髪し、女子は髪

を長く伸ばして頭上に結ぶ。祭日には、男子はサロンを着用し、女子は美しく彩つた絹の着物を着、髪には花を飾る。

食——彼等は農耕、漁業ともに心得てゐる。半島に於て一番よく米の出来る地方を占めてゐるのは本族であり、その海邊には種々の魚がとれる。

言語——バクニマライ人のものは、タイ語にその起原を持つマライの方言から成り立つてゐる。

セツル族 Senui とか、ブケットマライ種族 Puket Malay は多くタイ語を使用し、その發音は南方マライ種族より正確である。

宗教——殆ど回々教徒であるが精靈崇拜、佛教信者などもゐる。マライの回々教徒の特徴は、その戒律を固守することなく、回教信奉以前深く彼等の精神界を支配してゐた婆羅門の神が今尙根強くその胸中に生きてゐることである。住民は教區に似た組織をなし、各々禮拜堂 Surao と僧侶をもち、結婚、葬儀などを回々教風に行ふ。

最後にマライ種族の女子教徒と、その社會生活について一言しよう。回教の女子の生活といへば、直ぐ「チャルシヤフ」とか「チャードル」とか呼ばれる被衣と、それに伴ふ日のめもみない陰鬱な生活を思ひ出すのであるが、マライの回教徒には、決してそんなことはない。大儀式の折を除いては、男子と同様、その行動の自由を認められる。これは恐らく以前バクニマライ族間に女王制

か敷かれてゐたことよりして、今日スマトラ Sumatra のバタック種族に見られるやうな母權制度があつたと推定されることに何らかの關係があつたのではなからうか。

(ロ) チャオナム種族 (Chaonam)

名稱——チャオレイ Chaole (泰國語で水夫の意) オーランラウト Orang Laut (馬來語で海人の意) センウン Selung (緬甸語)、自稱はマートケン Mawken.

居住地、他種族との關係——馬來群島西岸を北から南へ原始的な小舟に身を委ねてゐる。本族は海の漂泊種族に屬し、以前は主に船上生活を送つて陸へ上ることは稀であつたが、近頃は海邊に多少永久的な部落を形成する傾向がある。彼等はチャクン種族の支脈で、その言語に或は心理作用に兩族似通つた點をみる。土族的にスマン種族と同族であると考へられてゐたことは最近に至り何ら根據のないことが判明するに至つた。ロガン Logan・トマン Thomson・スキート Skeat 諸氏の説は、チャオナムがモンクメール種族に含まれる可能性を指摘してゐる。

人口——少数であり、次第に減少しつつあるらしい。

容貌——身長平均はタイ人と殆ど同様で、短頭蓋、目は細く斜、よく通つた鼻筋、黒い眞直な頭髮、口ひげ、顎ひげの薄いことなどの特徴があり、殊に人目を惹くのは長年月の舟上生活のため足部が充分發達してゐないことである。肌色は黒く、大半が皮膚病にかゝつてゐる。

生活

衣服——男子は木綿の腰巻をしてゐるが、以前は木の皮を用ひてゐた。女子は時にマライのよいサロンやジャケツを藏してゐるが滅多に着ない。通常は腰から膝の上まである木の布を使用する。黒ずんだ鉢に、魚の齒、光つた貝、蟹の足などで出来た頸飾及び腕環を、或はきたない髪に貝を絡せたりする。文身は行れてゐない。

食——彼等は名通りの海の民であつて農耕に關する道具は持つてゐない。海邊紅樹の叢林は魚杖、網、吹管等を作る材料を供給してくれる。又、附近のマライ人との物々交換によつて小刀を持つてゐる。以上の道具は彼等の漁業に大なる彼割をなすのであつて、乾燥魚、乾海鼠を生産し又、眞珠貝、海藻等を採用する。潜水に長じ十六尋位迄も潜るといふ。

住——彼等はよく移轉するため、住家は至極簡單である。小舎は椰子葉を長い小割材を挾んで綴合せたものを竹の棒で組立てる。いざ移轉といふ場合は、天候を見計つて屋根を巻き、家材、網を修繕する道具、不意の悪天候に備へるための必要なものなどと共に舟で運搬する。

言語——マライ、タイ、ジャクン種族などの言語が混合して出来たもので、中でもマライ語が一番力を持つてゐる。

宗教——精靈崇拜の状態にあり、魂の不滅を信じ、死者の魂は生者を惱ますものと思つてゐる。

雷、嵐などに神靈ありとして食物を供へ祭る風がある。

結婚——グレイナム氏 Gray は何ら宗教的な儀式はなく只簡単な男の集ひと、祝宴があるだけだと述べてゐるが、猶深く観察する必要があらう。一夫多妻の風はなく、離婚は男子の希望による。分晩は舟中に行はれるが、身體が強いためか、習慣といふのか、半時間後には産婦はマングロウグ Mangrove を煎じたのを一服飲み、海で身を淨めて、すぐいつもの片手間仕事にかゝるといふ。葬儀——死者は葬儀もなくして埋められる。その墓地の附近へは人魂を恐れて暫くは寄りつかない。

音楽——本族獨特の樂器はなく、笛などは外來のものである。大漁の祝、新しい舟を作つた祝の折は歌舞に時を忘れる。

三、モン・クメール族 (Mon-Khmer)

(イ) サカイ種族 (Sakai)

パタニ州山中には一〇〇に満たない本族がゐたと云はれてゐたが、無智なマライ人が、スマン種族を誤認したのであらう。最近の研究により、現在タイ領内に本族は住んでゐないことが明かとなつた。

(ロ) ラワ種族 (Lawa)

居住地、他種族との關係——以前南はラヘン Raheng 及カムベンベット Kampengbet に及ぶ北方タイ一圓に占據してゐたが、七世紀頃 ロツプブリー Lopburi より北上してナコンラムブーン Lamphang 及びナコンラムブーン Lamphun の兩市を興したモン族移民に征壓され高度の混血をみた。本族は往昔中部タイを領有してゐたと信ぜられてをり、その舊都、古墳、北方史記 Pongawadan Muang Nua 等によつても、そのかみ、かなりの文化を有し、象兵を養つて實力ある國王に支配されてゐたことが窺はれる。現在ではチェンブイ Chiangmai の西南地方の山地ムアン、ホー ト Muang Hawt からムアンナム Muang Nam に亘る地方に點々とその村落をみる。附近平原の部落には言語、服装などではラオ族 Lao との區別困難であるが、本族の子孫と思はれる者多く見る。

人口——約二、〇〇〇、年々減少の傾向あり。

容貌——シヤム人よりも少し脊低く色も黒い。

生活

衣服——衣服の生地は殆ど青黒い木綿の布で、それをキルト風の短袴、或はスカート、ジャケツ、ターバン、ゲートルなどに仕立てゝ居る。女子にあつては衣服の縞とか、腰、首、膝に巻きつけた藤或は銀の針金、ターバンの結び方、髪結び方(後頭部鬘)などが他種族と特に目立つて異

る。スカートには所々幅広い白の横線が入つてゐるのが特徴である。男子の頭髮はシヤム人と同じく短髪が多い。

食——住家の附近には、果樹や野菜類、その他陸稻などを栽培してゐる。又、幼稚ではあるが鐵を製錬する方法をも知つて居り、鋤頭、小刀、その他日用品を作り、附近の種族と商つてゐる。

住——家は杭上に建てられ、しつかりしてゐる。主要材料は竹で、壁には屢々松板を用ひ、屋根は藁で葺かれてゐる。不潔なことはお話にならない。

宗教——妖術、精靈崇拜、佛教などを併せ信じてゐる。

(ハ) カムク種族 (Kamuk)

名稱——カ、Ka、或は Kache とし、召使の意。

居住地、他種族との關係——北部タイの東方ムアンナム Muangnan の山地方に本族をみかける。その發祥地は佛領ルアン普拉バン Luangprabang・チェンクワン Chiang Kwang 地方である。象使ひや、木材伐出人として年々チーク林に傭はれるが、定住する者も居てナム縣北方、チャイブリー Chaiburi・ウドーン Udon・ウボンなどの地方にも本族の村落が少數ある。

人口——タイ國領内のもの五〇〇——六〇〇。

容貌——ラオ種族、タイ種族よりも丈低く肌は黒い。その短小な幹、肌色からみて、一時ネグリ

ト族の部 入れられたことがあるが、注意深くスマン種族と比較する時は倭人説は否定されるであらう。

生活

衣服——男子は寒冷時に短いチョッキを着、中譯ばかりの禪をする。女子は腫迄の青色のスカートを穿いてゐる。スカートの縁には縞があり、上部に飾を施す。しかしカホック Ka Hok のは膝迄のキルト風のスカートである。又、首や腰のあたりに青色或は白色の縞ある短い青味のジャケツを着、銀の腕環、頭髮ピン、耳環をつけてゐるものもある。頭髮は結つて頭布を被つてゐる。

食——彼等はすべて、山腹の開墾地に農耕を営む。その主なるものは米、玉蜀黍、粟、煙草である。又漁業に長じて居り、昆で鳥獸を捕つたりなどもする。

住——村落は山の頂き附近にある。住家は材木や竹で比較的堅牢に建てられる。床には草を混ぜた藁を敷き、その高さは地上より六〇——九〇浬である。

言語——ラフ種族の言語と非常によく似てをり、その構成も同一である。

宗教——佛教を信奉してゐる者もあるが、大部分は惡靈祭祀教である。なにか不幸があれば惡靈の仕業であると思ひ、鶏、豚、家畜類を犠牲として祭るといつた風である。病氣の時なども、藥草に關する僅かの知識は持つてゐても、惡靈の祓といふ方法が常に行はれる。

葬儀——死骸は開墾地近くの叢林中に埋められる。

(11) チャーン種族 (Chawng)

名稱——Chong と書く。カムボヂヤ Cambodia では自らはタムレット Tamret・サムレー Samre と稱す。

居住地、他種族との關係——本族の居住中心地はカムボヂヤである。タイ國領内にはチャンタノン Chantabun 地方北方の山地に分散してゐる。

人口——少数。

生活——風俗、信仰、言語はカムク種族とよく似てゐる。漂泊生活をなし、叢林に産する樹脂、蜜蝋、木油、胡椒の一種などを採取してはシヤム人と物々交換により食料品を得るといつた状態であつたが、現在では火田法、水田法によつて米作をする途に進歩した。因にチャンタブン特産の白苧冠は本族の生産物である。

(12) チャオボン種族 (Chaobon)

名稱——往昔ロップブリ西方迄蔓つたベチャブーン Pechabun のラワ種族はラワーブラ Lava-pura, Lavapuri 或はラボ Lavo と呼ばれてゐた。コーラント Korat 地方のラワ種族はニアクオル Nia-Kuoe と自稱してゐる。

居住地——コーラットの東南及びベチャブーンの東北に集團をなしてゐる。

人口——約五、〇〇〇乃至六、〇〇〇。

生活——服装はシヤム人のと同じであるが、女子は別に長布を以て腰を巻き、右腰關節上で瘡状に結んでゐる。以前は火田法を行ひながら山地を移住し歩いたが、現在では殆ど定住してゐる。漆や香木を採取してゐる。言語はモンクメール語に似てゐるが、前記ラワ種族とは殆ど關係がない。

(13) ソー種族 (So)

居住地、他種族との關係——メーコン河 Mekong 左岸 (カムモン Kammon 地方) から移住して來た種族で東北國境附近のノンラン湖よりナコンパノム Nakonpanom 間及びソンクラム河 Songkran 及び南のプーバーン山脈 Pupan の北斜面にも本族を見る。

人口——二十年前には一〇、〇〇〇。

容貌——廣頭で頭形指數八一・一、鼻形指數九四・九、身長一米五七釐、肌色は暗い。

生活——服装はラオ種族に似てゐる。若い女子は華美な絹スカーフを髻にかけてゐる。農耕をなし家畜をも飼育す。

言語はクメール語によく似てゐる。

佛教徒であるが、迷信深く毒眼 The evil eye を殊に恐れる。〔引用参考書第二〕

(ト) セーク種族 (Saek)

居住地、他種族との關係——本族もメーコン河左岸から移住して来たもので、ナコンパノム Na-konpanom 北方のアサマート Asamart 地方及びターウテイン Ta Usen 地方に住む。ラオ種族によく似た生活様式を持つてゐる。

人口——二十年前には約六〇〇。

容貌——美貌の種族だ。

生活——ラオ種族に似て居り、風儀が悪い。言語はラオ語を著しく混合したモンクメール系のものである。

(チ) カレウン種族 (Kaleung)

居住地、他種族との關係——九十餘年前メーコン河左岸より現住地ナコンパノム及サコーンナコン Sakol Nakon 兩縣に移住して来た種族で、大部分はブーバーン山脈の斜面に住む。ラオ種族と判別し難い状態にある。

人口——約三〇、〇〇〇。

生活——母語を忘れてラオ語を話す。

(リ) カーブラオ種族 (Ka Brao)

名稱——ラオ種族は本族をカローベー Ka Lovae と呼んでゐる。

居住地、他種族との關係——メーコン河左岸からウボン縣のチャーマーン郡 Chanuman 及びケームマラート郡 Kemmarat に移住して来たものである。コーラット南方のカータンオン Ka Tang Ong も亦本族と同じで、捕虜又は奴隸として拉致されたものの子孫である。

生活——農耕法としい、家屋としい、孰れもラオ種族、シヤム人と同様であるが、母語は忘れてゐる。

(ヌ) カーヒンハオ種族 (Ka Hinhao)

居住地、他種族との關係——最近本族の一支脈が佛領よりムーン Mun 河口南方に伸びてゐる。カーブラオと同じくカー族に属す。

生活——火田耕作を行ひ、狩獵を好み又、野生の果實球根類を採取して生活してゐる。

(ル) スキ或はクキ種族 (Sui or Kui)

名稱——シヤム人はスキ(納貢民)と呼ぶ。この他にヲオスキ Lao Sui、クメールスキ Khmer Sui が居る。又ムロ Nilu 及びムロア Nilua ラクキマイ Kui Niai など多くの支族がある。

居住地、他種族との關係——スリン Surin、クカン Khukan、ウボン・ロイエット Roiet の諸縣に住む。本族はクメールの近親とみられてゐる。ヲオスキはスリン Surin、クカン Khukan、

ウボン Ubon の三縣に、クメールスキはスリン縣に散居してゐる。

人口——スキ約一二〇、〇〇〇（二十年前）、クメールスキとラオスキと併せて一四四、〇〇〇。

容貌——身長平均一米六三種、頭形指數八二、肌色稍黒色、ネグリートのやうな色。

生活——クキはラオ種族、クメール種族より文化が低い。農牧を営み、家屋は粗末である。佛教徒も居るが、殆ど精靈崇拜者である。

クキマイは儼然に長じてゐる。

(ラ) クメール種族 (Khmer)

名稱——シヤム人は本族をカメーンと呼ぶ。

居住地、他種族との關係——本族は主にウボン Ubon、コーラット Korat、プラチン Prachin 等カムボチャ本土に境を接する地方に占據してゐるが、中部タイ及びラーチャブリー Rajburi、カンブリー Kanchna buri 兩縣にも少数見られる。後者は捕虜又は奴隸の子孫である。彼等の祖先は、その開拓地に移殖され軍事的或はその他奉仕の代償として土地を與へられて定住したのであるといふ。今日は、その風俗、習慣共にシヤム人のそれと悉く同じで、只言語の發音に少し訛りがあるので區別することが出来る。

人口——泰國政府發行の *Siam, Nature and Industry* には一六〇、〇〇〇とあるが、Graham 氏

は現在約四〇〇、〇〇〇としてゐる。

容貌——比較的色黒く髯が深い。

生活——生活様式は總べてシヤム人と同じ。言語は母語を用ひ、シヤム語も又使ふ。

クメール種族は古代南印度地方より招來された婆羅門教と、それに伴ふ文化とを攝取した種族の後裔であつて、嘗ては高度の文化に迄達したことがあつたが、今では幼稚な時代様式に後退してゐる。繁榮時代の建立にかゝる寺院その他の建造物は今は荒れ果て、その華かなりし頃を物語る記念物として殘されてゐるが、本族はその誇るべき傳説すらも既に忘れ去つてゐる。

(ワ) モン種族 (Mon)

名稱——ビルマ人 Burma はタライン Talain と呼んでゐる。

居住地、他種族との關係——嘗てカムボチャ人の西隣に勢力を占めてゐたのは本族で、舊唐書に、水真臘の西隣、隴羅鉢底國 Divadvasti とあるのは即ち本族の建國になるものらしい。唐書國傳の崑崙王國は、ベリオ氏によれば、サルウエン河 Salween の河口及びその南テナセリユウム Tenasserim に當り、本族の建國せるものらしい。彼等は上代相當廣範圍に威を振つてゐたもので、王名又は官名に古龍又は崑崙を使用するが（扶南やマライ半島に都した頓遜盤々等にて）之はクメール語の王を意味する Kurung から出たといはれてゐる。八世紀頃メナム河上流に Haripunjaya

國を作つてゐたが、十三世紀末タイ族のため滅ぼされた。一方、イラワディ河口に榮へたペグ王国 Pegou も十一世紀頃ビルマに服し、十三世紀に獨立を回復したが十六世紀に滅ぼされた。又其の後一度屈起したが結局ビルマの征服するところとなつた。

現在、タイ國領内にあつては、メナム河流域ラヂャブリ Rajburi、ナロンチャイシ Nagorn Chaisi 地方に分散してゐる。その本族は主にその昔ビルマのテナセリユウム地方から捕虜として伴れ歸られたもの、或はビルマ人の壓迫による南方ビルマ地方からの亡命者の後裔である。シヤム軍隊への忠誠を誓つた彼等は農耕のための土地が與へられ、宗教儀式、言語なども彼等自身のものを用ひることを許され、今日ではタイのあらゆる公職に就いて共存共榮の實をあげてゐる。

人口——約六〇、〇〇〇。因にビルマには三二〇、〇〇〇餘殘存す。

容貌——身長平均一米六三種、鼻大きく頬骨は出てゐる。ビルマ人、シヤム人との混血著しく、その判別は困難である。

生活

衣服——男女ともにシヤムのバヌンとスカートとを穿いてゐる（但し女子のものはシヤム人のより大）、上流婦人は時にびつたり合つたジャケツを着て居り、その頭髮を獨特な後頭髷に結つてゐる。

住——シヤム人の住家の構造と少し違つてゐる。シヤム人の家には珍らしい切妻壁 Gable-end が、東と西とにある。

言語——モン種族独自の言語と、タイ語を併用してゐる。初等教育の普及は總てのタイ國領内の種族に勝手な文化的割據を許さなくなつた。

宗教——前述の如く彼等はその儀式に於て傳統を守つてゐる。大部分佛教信奉者であるが精靈崇拜も依然行れて居り、之に仕へる巫覡もゐる。

葬儀——火葬、棺は彩紙、孔雀の尾、金具で飾らし、豪華な儀式を以て送られる。

四、西藏ビルマ族 (Tibet-Burma)

(イ) ムツソー種族 (Mushö or Mussö)

名稱——彼等自身はラフー Lahu 若くはラフーナ Lahuna と稱す。ムツソーとは支那名の轉化したものであることは明白である。

居住地、他種族との關係——彼等の傳説はユンナン Yunnan に於けるタリフ Talifu の南方(西藏 Tibet から程遠くない處)に於て古代ムツソー王國を建立してゐたことを物語つてゐる。西藏は本族發祥の地であるといへやう。

南方への移住は他種族の侵入と、人口過剰による内部的鬭争に起因すと云はれ、今日も猶南下し

つゝある。この南下には支那人との抗争も考へられるが、之は十九世紀初期に於いて終熄した。現在、タイ國領にあつては殊にムアンファン Muang Fang 地方、パヤップ州 Payap の山地方などに本族の村落をみる。

人口——タイ國在住のものは黒ムツソ— Muhsó Dam 及び赤ムツソ— Muhsó Daeng の二種で併せて一〇〇人に満たないと推定されてゐるが、元チエンセン Chiengsen の西方國境附近に占據してゐたコー Kam 或はアカー Akha 種族は、爾後ブレ— 北方の山中に移住して村落を形成してをり、之らもムツソ— の近親族であるから、合算すれば相當の數にならう。

容貌——明かに蒙古型 Mongolian type であつて、その背はしつかり伸びきつてゐる。

生活

衣服——ユンナン支那人 Yunnan Chinese の衣服と似てゐる。男子はだぶだぶしたズロース、ゆるい上衣、腰巻、ターバンなどで青と黒色のものを好む、女子は青黒い生地色の横縞を織込んだスカートを穿き、長い袖の手首盛りだけ飾つた短い青黒いジャケツを着てゐる。盛装の折は下袴が着用される。本族の特異な風俗としては、銀を悪魔を防ぐものとして尊重することである。殊に女子にあつては、環——腕環、耳環、首環——に又ジャケツには、一、二ヶの銀圓盤を吊してゐる。本族の衣服はその色よりして地味ではあるが、不快な感じを與へない。

猶、この地方 Further India の山地住民共通の持物に雜糞がある。その中には煙草、煙管、マツチ、櫛、剃刀、毛拔、きんまの葉、一、二食分の煮た米などを入れてゐる。

食——彼等は狩獵もやれば農耕もやる。獵具は一般に弩であつて、矢には時に毒を塗つてある、彼等は約九〇米も離れた處にゐる猛獸をも仆す。農耕は部落附近の山の峯や地面を耕して、米、玉蜀黍、粟、煙草、阿片などを栽培する。生産の大部分は自給のためであるが、阿片は他種族へも賣らるし。

住——家屋は木材と竹とで上手に作られてゐる。

言語——文字は持つてゐないが、支那語の出来る者が少數ゐる。

宗教——主に精靈崇拜であるが、中には佛教徒もゐる。當地方 Further India 一圓を視察したチヨ— ジスコット氏 George Scott の説によると、その發祥地では一種の佛教徒であつたが、南下して萬有神教 Animism へと後退したものとゐるといふ。本族の宗教上の風習が混沌としてゐるのはこれが爲めであらう。

葬儀——木棺に納め嚴肅な儀式の中に葬られる。

音楽——前記の雜糞の中には、日本の笙の如き樂器をも入れてゐる。(南支の苗族にも笙をみるが、日本の笙はその源をこの地方に求むべきであつて、その製作法は恐らく林邑樂の輸入とともに

傳來したのであらう。笙は小さな細長く尖つた瓢箪に竹をさし込んで作つてあり、その構造、吹奏方法の原理は日本のものと同じである。この楽器はケン *Ken* と呼ばれ本族の愛好措く能はざるものであつて踊の伴奏に用ふ。ケンの種類には幾種もあつて北方の山地方にあつては三、四音しか出ないものがある。(ボルネオの蕃人中にもこれと全然同じ笙を持つてゐるのがある。)

(B) カーンブリラワ種族 (Lawa of Kanburi)

居住地——カーンブリ Kanchna Buri 縣北方にラワ種族と稱する住民の村落が多數散在してゐる。

生活——本族は隣接種族との混血度が密であるため、その風習及び服裝にはとりたてて書く程の特色はないが、只その言語はチェンマイラワ *Chiangmai Lawa* 及びチャオボン *Chaobon* のとは異なる独自のものを持つてゐる。この言語からして本族は明白に西藏ビルマ系のものであるといふべきであらう。

(C) カレン種族 (Karen)

名稱——Karen と書く。

居住地、他種族との關係——泰國政府發行の *Siam; Nature and Industry* には本族を無所屬として取扱つてゐるが、その地理的環境からみると西藏ビルマ族に屬すと云つても大過はなからう。

次に述べるティン Tin、カティン *Katin* にも同様のことが言へると思ふ。即ち、本族は主に南部シヤンステーツ *Shan States* 及び下ビルマに占據するが、タイの西南方山地帯たるメーホーンソン *Mehongson* 及びチェンライ *Jiang Rai* 兩縣より南は半島のベヂャブリーに及ぶ國境地帯に住居するもの約六萬人ある。葬儀の風習、その他はビルマの北方乃至北東に住むカティン族に似てゐる。本種族はサコー *Sgaw*・プウォー *Pwo*・プカイ *Bghai* の三支族に分類されるがサコーはタイには居ない様だ。「但し、(Siam; Nature and Industry) には在住と記す」。

人口——六〇、〇〇〇 Siam; Nature and Industry 三〇、〇〇〇 Graham
因にビルマには一、二〇〇、〇〇〇程ゐる。

容貌——體質はマライ人とシヤム人との中間にあるものの如く、身長一米六四、體質は熱帯地方特有の瘦せぎすであるが、しつかりしてゐる。女子は一般にいゝ顔立をして居り、色も白い。

生活

衣服——ゆつたりしたジャケツに、ゆるやかな長上衣を被てゐる。プウォー族は、髪を捻り上げて頭布で被ひ、その端を角の様に額につき出してゐる。

食——農耕に長じ、陸稻、綿、玉蜀黍などを栽培し、錫鑛及び、鹿の角などをシヤム人に賣つて生活必需品を補ふ。

住——住家は長いバラック建風のものでその主要材料は竹と、草を混ぜた藁である。
 宗教——よく開けた人達には佛教、キリスト教が信奉されてゐるが、他は一般に精霊崇拝者である。

結婚——幼い頃に耳に孔を開け六歳迄に婚約をする。しかし成長後當人の自由意志で變更されることがある。一夫一婦制で性関係は極めて厳しく、故郷を離れることを嫌ふため他種族との結婚は稀である。離婚は相互の同意による。女子の姦通に對する制裁として耳を切落すことがある。

葬儀——死去は火器の一斉射撃と、銅鑼とによつて部落民に傳へられる。葬儀の折は舞踊や、宴遊をして死者の靈を慰める。死骸は武器、日用品などと共に棺に納められる。墓上には一時的な小舎を建て、食物とか、故人が平常最も興味を覚えてゐた仕事を表象するものなどを供へる。

死骸の處理については土葬、水葬、風葬、又は土葬と中間的な土塚、石塚の製作によるものなどあつて、これらの淵源する思想は、その文化程度の上下異同によるものではあるが、食物、犠牲、器具の供奉は英國の土俗學者タイラー氏の述べた如く、世界的な共通現象ともいふべきものである。

音楽——Frog Gong とよぶ名で知られてゐる、眞鍮を鑄て作つた銅鑼は、凡ゆる儀式に用ひられる。

(三) テイン種族 (Tin)

居住地——ナン nán 縣の東北部山地。

容貌——背高く、褐色、鼻平たく、頬骨が出てゐる。

生活——農耕をなし粟、米の栽培に従事す。服装は木綿の布を羽織り、男は下帯を、女子は腰巻をする。

住家は杭上式であつて、結婚は賣買結婚である。土葬をし、或る部落では死體を一年間乾しておきて埋葬するものがある。

(ホ) カーティン種族 (Ka-tin)

居住地、他種族との關係——ナン縣東北地方に住む。北方ビルマの高地のものと關係あるものゝ如し。支那人の所謂、裸體之なり。

人口——ティン族を合せて五、〇〇〇乃至六、〇〇〇、因にビルマ領在住のティン族は二八九、〇〇〇、カーティン族は一四六、〇〇〇である。

容貌——背は高く、背は斜め、頬は出てゐる。面長と圓顔の二種あり。

生活——衣服は上衣と下帯、ターバン、特異な風俗としては、男は膝の下に幾つも環をつけ、女子は胸の周圍に環をはめる。

火田耕作を行ひ、玉蜀黍、煙草などを栽培、宗教は精靈崇拜。

結婚は異族結婚、特定の氏族間のみで婚姻が行れる。夜、嫁を奪ふ風あり。

土葬をし、塚の上には藁の圓錐形屋根を造り周りには溝を掘る。

五、タイ族 (Thai)

(イ) タイ種族 (シヤム人)

名稱——本族はコンタイと自稱す。コンは人、タイは自由の義。過般の國名改正も近時の世界的民族自覺の機運に促進されたためであらう。

居住地、他種族との關係——本族は西南支那より漸次南移して來たものであつて、支那史籍(後漢書西南夷傳)に見える哀牢夷、若くは唐代に大いに榮へ元代迄續いた南紹帝國の構成住民は、本族であると漠然と考へられてゐるが、未だ適確にこれを説明した者は居ない。當地方の民族的、土俗學的研究をすゝめてゆくならば、何らかの暗示を得、ひいては南海地方の文化系統をも明るみに出すことが出来るであらう。彼等の南移は極めて古くから行はれてゐたのであつて、徐々に地盤を固めつゝ、あつたメナム河流域の本族は、十三世紀中葉(一二五三年)、忽比烈軍の鐵蹄下に完全に蹂躪された南紹帝國民の大量南下を加へて、急速に強盛となり、モン種族の Haripunjaya 國を滅した。一方更に南方同族のアユタイヤ Ayuthia 王國の崛起をみるや、その勢はマライ半島に迄も

及んだ。かくして彼等の神びゆく先にはビルマとカムボヂヤの兩強敵を作ることとなり、十六世紀には一時ビルマの傘下に統べられたことさへあるが、力戰苦闘、十八世紀末には再びその威を四隣に示すに至り、一七八二年、チャオプラヤーチャクリー Chao Ppha Chakri はバンコック王朝を興してその支配權は、東はカムボヂヤ、南は今の馬來聯邦に迄及んだ。然るに間もなく歐米諸國の資本主義的壓力次第に加はり、殊に英佛の息吹きを東西南の三方にひし／＼と感ずるに至つたが、英佛兩勢力相互牽制の結果、兎に角今日迄印度支那半島唯一の獨立國としてその存在を保つてゐる。今や世界的大變動の機に際會し、本族も亦、内は民族精神の高揚を計り、外は多難の外交に對處しつゝあるが、泰國の根幹たる本族の民族的自覺こそはその國運を左右するものといはねばならぬ。

人口——タイ族の分布は極めて廣範に亘り、東は南部支那及び海南島、西はアッサムに至り、その總數一八、〇〇〇、〇〇〇を下らず、中九、〇〇〇、〇〇〇がタイ國內に住んでゐる。

容貌——蒙古人的特點を多く有つてゐる。背は低く男子平均一米五三釐、女子平均一米二二釐、短頭で、頬骨出で、色は他種族より稍黒く、鼻は下部が著しく廣く平たく、長い斜眼と、大きな耳を持ち、唇は大きい。又、交通に水路を利用することが多かつたため、下肢の發達は腕や肩のそれよりも悪く。

衣服——旅人の目を惹くものに「バヌン」がある。バヌンは長約三米、幅九〇厘の布で、男女共に之を身體に巻きつけ、上部はバンドでとめ、下部の餘つた部分を繩状とし背に廻して端をバンドでとめる。バヌンの色は曜日によつて異つてゐた（日—赤、月—黄、火—鳩羽色、水—水色、木—緑、金—桃、土—紫）が、近頃ではこの規則は守られてゐないとのことだ。地方では裸半身の者が多いが、市では男は白の詰襟服に靴、靴下を穿き、女子はパホムといふスカーフを用ひ、外出の際はチャケツを着る。女子の斷髪の風習はアユテイヤ王朝時代カムボヂヤの大軍を防いだコーラットの烈女クンデンモー（コーラットにその銅像がある）の遺風である。

食——本族は殆ど勞せずして實るといふメーナム河流域の沃野に農耕を業とする。産物は米を第一とし、甘蔗、煙草、棉、豆その他いろ／＼の野菜などである。従つてその主食物は米であるが、煮方は日本と異り炊飯の際に出来る糊水を棄て、バラ／＼の御飯とし、それに椰子油を主にした香高いカレー粉を調味料として加へる。暑いためかうしなければ腐り易いし、食べ難いからといふ。一般に刺戟性の食物を好む。カオチーと名づける水漬け御飯が喜ばれるのもその一例であらう。食事は朝夕の二回、すべて指を用ひて、箸は使はない。この他熱帯産の種々の果實——ドリアン、マンゴステン、マンゴー、パイヤ、パイヤ、ナイナア、椰子の實などが愛賞されるのは他種族と同様である。

る。

住——「水の母」メーナムはあらゆる意味に於てタイ國の根幹をなし、住居にもその著しい影響を見る。毎年雨期の氾濫は處々に杭上式家屋の出現をみるに至つた。典型的なタイ種族の家は地上二米二〇厘——一米八〇厘の高さの杭上に、正方形の三邊に、三ヶの長方形の家を結合したやうな形の家を作り、出入は他の一邊の中央に設けられた梯子による。主材料はチーク材、壁は割竹を編んで居り、屋根は草及び椰子葉で葺く。又、アユチヤの如き水の町にあつては、民家は全部床板から下は船の底板風に作つて何時でも移動出来るやうにしてある。浮屋は太い杭に繋ぎ、すべて河の中流に向つて作られてゐる。

言語——佛教の傳來に伴ひパーリー Pali 語及びサンスクリット Sanskrit 語の流入を見、當時の文學、宗教書はすべて之らの文字が使用されてゐた。と同時にクメール種族との關係からクメール語の影響も考へねばならぬが、判然たることは知られてゐない。現在のタイ語はラーマカムヘン王の創作であると言はれ、その發音には支那の四聲に似た點あり、又、文の構造はアリヤン系統即ち英語に似通つてゐる。近年國民意識の向上につれてタイ語が普及されつゝあるから、全國土にタイ語の普及を見るのも間もないことであらう。

宗教——バラモン教の要素を多分に含んだ佛教を信奉してゐる。即ち、彼等はエメラルドの佛像

を擁して南方佛教國の支配者であると自誇してゐると同時に、自在天、帝釋天、那羅延天などのバラモン教神に至る處に祭つてゐる。勿論この外にも精靈崇拜の遺風はある。彼等の信心深いことは周知の事實で、佛堂、佛像に貼りつける金箔だけでも年に一千萬圓に上ると聞いては呆れざるを得ない。この風習は玉杯象箸式にすべての佛教行事にも適用されるので、その國民經濟に及ぼす影響は少からず憂慮すべきものがあるといはねばならぬ。佛教崇拜は諦觀的に平和を愛する女々しい國民性を作り上げた一方、その國民思想統一の點からは役立つてゐるのである。例へば、キリスト教の布教のための社會施設の如きもたゞ一つの社會施設としての意味しか有してゐないことは注目に價する。

結婚——通常、男子は二十一、二歳、女子は十五、六歳で結婚する。婚約は當人らの感情はさて置いて結ばれるが、若人らの交際は正しい嚴格な禮儀を守れば許されてゐる。結納金に當る乳代、黃道吉日を撰んでの式典など、支那や我が國の風習とよく似てゐる。式の當日、婿は行列を作つて嫁御の家に行き、牛豚、果實などをその兩親に送贈する。婦家はその前日から、佛像に結び付けた聖絲を惡魔除けのためとて家の周りに巡らして待つてゐるのであるが、僧侶は讀經の後、その聖糸を新郎新婦の頭上に連結する。次で列席者が、兩肘をついて合掌した夫婦の掌へ聖水を注ぐ。翌朝も亦、僧による祈りの式があり、新夫婦は僧へのもてなしをして式は了る。密月は夫婦のための新

しい住居に初まる。以上は上流家庭に於ける例であつて、一般には至極簡單である。

古來より善妻の風が行れて居り、最初に登記された者を正妻といひ、全妻子の統制權を持つてゐる。丁度、支那でいふ第一夫人に當る。因に一夫一妻主義が人民代表議會で可決を見たのは一九三四年のことである。

葬儀——屍を水で清め、盛裝し、口に淨土への通門料となる金錢を入れ、僧侶の讀經裡に俯伏せに喪又は棺へ納める。棺は主な部屋に安置され、一、二夜の御通夜の後、寺院へ運び茶毘に付す。上流家庭では數年間棺を安置し、寺院に運ぶ數日前に新棺に納め換へ、火葬の當日は寺院の境内で芝居や煙花などの餘興を催し、又、金錢を貧民に施したりする。葬儀は凡ゆる儀式の中で最も鄭重を極め、それに要する費用も亦莫大な額に達する。一般に分以上の金を使ふ習があり、これにつけこむ支那人の惡辣な營利行爲などにより、その國民經濟に及ぼす影響は大なるものがある。石碑は建てないとのことだ。

音樂——音樂に對する愛好心は別して強いものがある。タイの音樂の原則として、器樂は聲樂の模倣であり、器樂は聲樂の伴奏樂であることに注目せねばならぬ。樂器には打樂器が最多で、風奏樂器、絃樂器の順にそれ／＼使用される。

その他——本族並にタイ國全般に佛教を信じてゐることは既述の通りである。佛教崇拜と祖先祭

祀、祖先祭祀と家族制度、この間に何らかの強い楔が必然的にあると思つてゐたが、タイ國には我が國人の理解する様な家族制度がない。これは勿論、國體の相異に基くものではあるが、佛教と家族制度、タイ人の對社會觀を深く探究すれば面白い暗示が得られるのではなからうか。

(ロ) タイコーラット種族 (Tai Korat)

居住地——コーラット縣民は大半本族に屬す。恐らく十四世紀の中葉、アユチャ兵の當地方攻略の後、クメール人女子と混血したものであらう。

生活——頑強な体格、至つて勇敢な性質を有す。奇妙な歌調子でタイ語を話す。

(ハ) ラオ種族 (Lao)

名稱——北方ラオ種族はラオと呼ばれることを好まず、タイと言はれんことを願ふ。それはラオと云ふのは侮蔑を意味するからである。ラオ族は黒腹ラオ Lao Pung Dam (北方ラオ)、白ラオ Lao Pung Khao (東方ラオ) に二大別され、後者は更に言語によつてウキエンチャンラオ Lao Wi-engchan・カオラオ Lao Kao に細別される。この他に猶ラオソンと稱するものもゐる。

居住地、他種族との關係——北方から南下してメコン河流域の平原に幾多の小國を建立し、四邊の強國の附庸國となつてゐた。十世紀以降、漸く獨立の態をなすに至つたがその統一工作は充分ならず、十八世紀初期ルアンブラバン Luang Prabang・Vientiane 兩國の如きは互に干戈を交へ

た。シヤム人勢力の伸長漸く著しくなるに及び、遂に後者は滅ぼされ、前者は附庸國となつた。然るに十九世紀末、ラオ種族占住の一地方がフランスの保護下におかれたので、ルアンブラバンの王統は名のみ地位を保ち、タイ國領内の小國王々統も有名無實で、政治的特權を與へられてゐない。近時交通網の發達に伴ひ、シヤム人との融合は急速且つ自然に行はれつつあるから、兩種族の完全なる結合も間もないことであらう。次に上記の二大別は文身の有無によつて定められたのであつて、文身あるのが黒ラオ、してゐないのが白ラオである。北方ラオは北部タイ一圓に分布し、ナコンサワン Nakhon Sawan 州に及ぶ。又アユチャ Ayuthia・ナコンチャイシ Nakhon Chai Sri にも點々として村落をみる。東方ラオはメコン中流地帯に住み、その支流は東部タイ一圓に及ぶ。猶又、ウキエンチャンラオ L. Wiengchan はウドーン Udorn 州の西部、チャイブーム Jaibum・ナコンラーチャシーマ Nakhon Rajasima・ウボン Ubon・クカン Khukhan・プラチーン Prachin・クラピン・ナコンナーヨク Nakhon Nayok 縣等に住み、ウドーン東部及び舊ロトイエット Roi-et 縣民はカオラオ L. Kao に屬す。この外ラオソン L. Song はベチャブリー Bhejuri・ラーチャブリー Rajuri・ナコンチャイシー地方及びピサンローク Phisanulok のピチット Phichit などに住居する。

何上ラオはその源を西南支那地方に求めるものであつて、後者、白ラオは、黒ラオ(ビルマのシ

ヤン種族と關係あり)の現住地への到達以前に南下したものの様である。

人口——タイ國領内の本族は五、二〇〇、〇〇〇。

容貌——ラオ族は非常によくシヤム族に似てゐるので、肌色の白いこと、丈の高いこと(一米五九厘)を除いては區分することは出来ない。頭型は亞廣頭、指數八三・六。

生活

衣服——男子は頭の横と後側とを刺つて頂きを残しておく風習あり。衣服は大體シヤム人と同じ。ラチャブリー Rajburi の西方山麓には本族の村落をみる。この村人は白ラオの支脈であつて、衣服にその面影を残してゐる。男子はびつたりした短い黒のズロース・銀ボタンのついでゐる黒い上衣、黒の麥葉帽子などを着用する。女子の衣服には、膝迄の長さのスカート(幅廣い青色の線で浮き立たせてある)、黒い肩掛、黒のターバンなどがある。何か特別の場合は、男女ともに赤味かゝつた糸で上品に刺繡した長い黒生地の上衣を着る。

純北方ラオ族の女子は腰から足首迄ある縞の入つたスカートを穿き、時に肩掛をかけ、びつたり合つたジャケツを着てゐる。但し腰からは裸の場合多し。女の髪は長く、頭上二〇三高地型に盛り上げ、花かざしなどもする。一般にタイ族の女より色白く綺麗で快活で女らしい風情がある。

食——農耕はあまり巧でなく、水田、畑の耕作は女の仕事で、男子は専ら狩、漁業に従事する。

又平地住民と山地住民との仲介者として商をしたりする。銀細工、彫刻、刺繡、繪畫等には見るべきものあり。タイ族のものに比して遜色がない。

住——杭上家屋で屋根は突出してゐる。ビルマ人との交渉の結果、建築様式にもビルマの様式をみる。

言語——その地理的環境から、タイ語と相互關係を有つが、クメール語に起源を有つものは少い。猶タイ語とは異り、サンスクリット、パリー語などの外來語を多く含んでゐない點は注目にする。文字はシヤン Shyan 語に似てゐる。

宗教——大部分佛教徒であるが精靈 Pii 崇拜者もゐる。佛教の流布については、A.D. 五世紀頃南方より到來したと一時説へられたが、それ以前、ラオ族が佛教徒であつたことが判明したのでこの説は否定され、今では北方學派に屬する初期のものを受け入れたのであるとの見解が正當視されるに至つた。勿論、後代になれば、セイロン Ceylon の南方學派のものも取り入れてゐる。北方ラオの信仰は、その性質と相俟つてシヤム人、東部ラオ種族よりも敬虔である。因に北方ラオ種族の性質をみるに丁重懇懇、正直勉強で、低劣な東部ラオとは比較にならぬ。

結婚——男女間の交際は一般に自由で、結婚式はその正式化の意味を有するにすぎぬ。仲人の老人が婦家に行き聘財を定め、定まれば兩方の親戚友人集り、約婚の食事をなし、吉日を選ぶ。當

日、婿は嫁の家に至り、花と果實とを贈り、兩親に所定の金をおくる。仲入は兩人の腕に木綿糸を結び、之に酒を汲み、そのお流れに會席一同が口をつけ式が終ると次で大宴会となる。〔六ノ三二頁〕。

葬儀——死體は棺に入れ、蓆で包んで附近の林中に埋める。一定時後、發掘し遺骸を焼いて改葬する。

音楽——樂器にはケンといふものあり、日本の笙の起源とみられる。ムツソイのものよりはずつと進歩した構造を有つ。その大さにはいろ／＼あつて、ポケットに入れられる程度のものから、高音や、Wide Compass の出せる十四或はそれ以上の簧を有するものなどがある。

本族の文身について——空想的な怪物と龍などの繪が、足首或は膝頭の邊から腰にかけて一面に施されてゐる。それは一連の魅惑的な呪紋でもある。青黒い肉襦袢でも着た様に全身を文身するに はなか／＼の苦痛を我慢せねばならないが、白ラオ種族には成人の表象として缺くことの出来ない 裝飾である。色素は Coconut Oil を焼いて作った炭素であるが、呪的 Square として或は魅力となすためか上半身の文身には鉛丹も用ひられる。

(ii) シャン種族 (Shan)

名稱——ンギオ Ngion 種族と呼ばれる。自らは大タイ Tai Yai と稱す。

居住地、他種族との關係——主として西北國境サルウキーン河排水地域に住み、南方シャンスティツのビルマ人との關係がある。昔、バンコック、チャンタブンなどには貿易業者、鑛山業者の植民が行れた。

一九〇一年、北方地區のシャン種族がシャムの統治者に對抗したことがある。少勢ではあつたが軍隊の出勤をみた程であつた。

人口——タイ領内のは約三〇、〇〇〇。

容貌——身長一米六二種を越えぬ。痩せ方であるが、しつかりした體格である。顔色や、明るく鼻はよく通つてゐる。目は僅かばかり斜である。

生活

衣服——男子の衣服はゆつたりした黒のスボン及び白い上衣、頭布などである。

食——棉、茶、稻を栽培する一方商業に従事し、玉、琥珀の採集を行ひ、金屬細工に巧である。

住——枕上家屋に住む。

言語——言語はその構造こそ幼稚であるが、音聲學上タイ語より快感を受けるとグレイナム氏は言つてゐる。

宗教——宗教、習慣は英領シャン州ケントン Keng Tung の人達と共通な點を持つてゐる。今

日佛教に歸依してゐるが、龍蛇や、精靈崇拜なども行はれてゐる。

結婚——男女の意志が通ずると女子は先づ男の家に來り、男だけがその女の家に茶と鹽を進物として訪問し求婚する。女方の親が同意した時、女は親の家に戻り正式に結婚式の手筈を備へる。上流家庭にあつては仲人をたてるのが普通である。結婚式には、夫の方は鹽と茶と金を持つて嫁家に至る。金は女の親がとるが、村の長老はその鹽と茶を持つて戸外に出て大地と日と天を祭り、結婚の照覽を乞ふ。

それから七本の糸をもつて新郎、新婦の手（男は右、女は左）を結合させ、次いで共に米飯を食する。

葬儀——死者には新しい着物をきせ、火葬或は土葬、林の中に埋める。

(ホ) ルー種族 (Lu)

居住地、他種族との關係——大部分はメーコン河東岸に住み、チェンラーイ Jieng Rai 縣スコエーン Kon、種族も本族の支脈であるとみられる。又、グレーナム氏に従へば、タイ國領内にあつては北部のナン Nan 地方に多く住むが、その移住は比較的新しいとのことである。英領シャンステイツ Keng tung には本族が多数存在してゐる。

人口——約五〇、〇〇〇。

容貌——女子は丸顔で美しい。一體に北部タイの種族は南方よりも綺麗である。

生活

衣服——生活全般に亘り、ライ種族に似てゐる。文身してゐる者は、きまつて濃青色の生地のだぶ／＼したズロースと、赤いフランネルの小片で刺繡し、時には珠數玉の様な種子或は青貝のボタ、ンをつけた短い上衣を着てゐる。頭髮は側面、後側を剃り上げ、シヤム人の老人やラオ種族と同じ様に餘り長くない髪の毛の總をのこしてゐる。頭には白若くは赤のターバンを巻き、その上に縁の廣い帽子を戴いてゐる。女子は髪を頭上に高く結び上げる。

言語——ラオ種族のものに似てゐる。

宗教——佛教を信じて多くの寺院を建て、ゐるが、精靈崇拜の傾向も強い。

その他——ルー種族は男女ともに耳飾りをする。耳朶を刺し通して次第にその穴を大きくし、巻いた紙、平たい圓い木などを挿入出来るやうにする。穴の大きさは五種にも達することがある。富裕の者は、圓筒状に捲いた分厚の金の耳朶栓を用ひる。その金の重さ、四オンス（一オンスは金衡で八匁二分九厘）に達するものもある。

又、北部タイ地方人共通のものとして雜糞が愛用される。その中には煙草、蒟醬などが入れてある。武器には短劍、燧發式銃などがある。

(ハ) プータイ種族 (Puthai)

居住地——本族の中心地はメーコン河左岸地域であるが、東部ウドーン Udorn・カラシン Kal-asindhu・ウボン Ubon 縣にも住む。

人口——タイ國領内にあつては七〇、〇〇〇。

生活——言語はシャン語に似たところがある。衣服はラオ種族とは異り、女子は頭帕布を巻いてゐる。顔は白いものをみかける。

一般に佛教信者であるが精靈崇拜の傾向も多分にある。

(ト) ヨー種族 (Yaw) とユアイ種族 (Yuai)

居住地——兩族ともにメーコン河左岸から移住した者であつて、前者は主にサコーン・ナコーン Sakol Nagorn 町のあたり、及びナコーン・パノム nagorn Bhanom の北方に住み、後者はアーカート Akat Amuei 附近に居住する。

生活——兩族ともにラオ種族の影響が大である。

(チ) サムサム種族 (Sam Sam)

居住地、他種族との關係——シヤム人とマライ人との混血兒であつて南部タイの西海岸地方に住んでゐる。Messrs. Annandale 氏、Skeat 氏の探検以前には本族は知られてゐなかつた。

生活——回教を信奉し、マライ人と同様の風習を持つ。

六、所属未詳の種族

(イ) メオ種族 (Meao)

名稱——タイではメオと呼ぶが支那人はミアオツア Miaotza (苗族) と呼び、自らモン Mong と稱してゐる。

居住地、他種族との關係——本族は十一若くは十二に分類される。メーコン河を涉つてフランスの勢力が侵入するや、タイ國は本族居住地の大部分を失つたが、ナン及び北部タイの山地帯には若干の村落が発見される。今日も尙東へ西へと廣範圍の移住が行はれつゝあるため、一部はタイ國領内にも現はれ、ぼつ／＼とその村落を建設してゐる。ダレーアム氏はその著「サイアム」に於て本族がモンクメール系といふよりも、寧ろその言葉風俗の點に於てチベット・ビルマ Tibet Burma 系に屬するものが多いことを指摘した。

人口——約一、〇〇〇乃至二、〇〇〇。

生活

衣服——ニンナン Nunnan の支那人との長い交渉によりその言語に、髮型に、或は衣服に、多くの類似點を得た。たゞ女子の衣服にはその影響はみられない。即ち、タイ領内のもものは陸道の變

のあるスカートを着いてをり、手頸迄袖のある縁を飾つた Cross-over Coat を着てゐる。頭に彩色した頭布をし、脚にはデートルを巻くことがある。女子の手になる機織、刺繍にはみるべきものありといふ。

食——火田耕作を行ひ米、玉蜀黍、煙草、大麻、阿片その他いろいろの野菜を栽培し又、羊、小馬などを飼つてゐる。

住——木材、泥壁、石の床などで丈夫に作られた家に住んでゐる。中には粗末な寢床、腰掛などがおいてある。新開拓地を求めて十二年乃至十五年毎に一部落相携へ、略一年程もかゝつてゆつくりと移住してゆく。

言語——かつて文字を有してゐたらしいが今はすつかり消滅して支那語が之に代用されてゐる。又支那の曆を用ひてゐる。

宗教——一般に精霊崇拜。強き精霊は米より生れると信じてゐる。

結婚——一夫一婦主義であり、入念な儀式を経て結婚生活が初まる。

葬儀——白い雄鶏が死者の傍におかれる。これは故人の霊が天國へ行くのを妨害せんとする大蛇場と戦ふためだとのことである。この俗信には白鳥説話との関係も考へられるが、すべて白が尊ばれるのは、その純無垢な清淨感が人の心を動かすためであらう。

(四) ヤオ種族 (Yao)

名稱——ヤオイン Yao Yin とよばれる。

居住地、他種族との關係——本族は西南部支那、殊に廣西省をその中心地とし、現在タイ國領にあつてはチエンセン Chiang Sen・チエンクオン Chiang Kwang の附近或はナン Nan 地方にその村落をみる。その附近の種族と同じくユンナン支那人の生活様式を多く取り入れてゐる。

人口——約一、〇〇〇。

生活

衣服——男子は足下迄あるゆつたりした長上衣を被、その側面は膝あたり迄切つてある。支那服の様なものであらう。女子は斷髪でなく結つてゐる。中央に穴を開けた、縋ていろ／＼に彩つた布が四隅から垂れ下つてゐる四邊形の當 Pad を紐でしつかり頭上に結ぶ。髪は當の穴を通し、上部で樹脂で讀膜状に固めてゐる。一度作り上げるとなかなか崩れるものではない。

食——彼等は立派な開拓者で、米、煙草、綿、玉蜀黍、阿片等を栽培し、羊や豚なども飼育してゐる。

住——丸太を割つて用ひ、床は土で固めてゐる。家中は暗く、土のかまどの煙ですつかり煤けてゐる。

言語——大多數の者は支那語に通じてゐる。

宗教——精靈崇拜であつて、播取、刈入れ、病氣、新屋祝などには殊に丁寧に祭を行ふ。

結婚——支那人の影響であらう、いくらか形式はつてゐる。親戚立會ひの下、長者によつて祝物が贈られ、星の比較のことなど徐ろに運ばれてゆく。一夫一妻である。

(ハ) カートーンルアン種族 (Ka Tawng Luang)

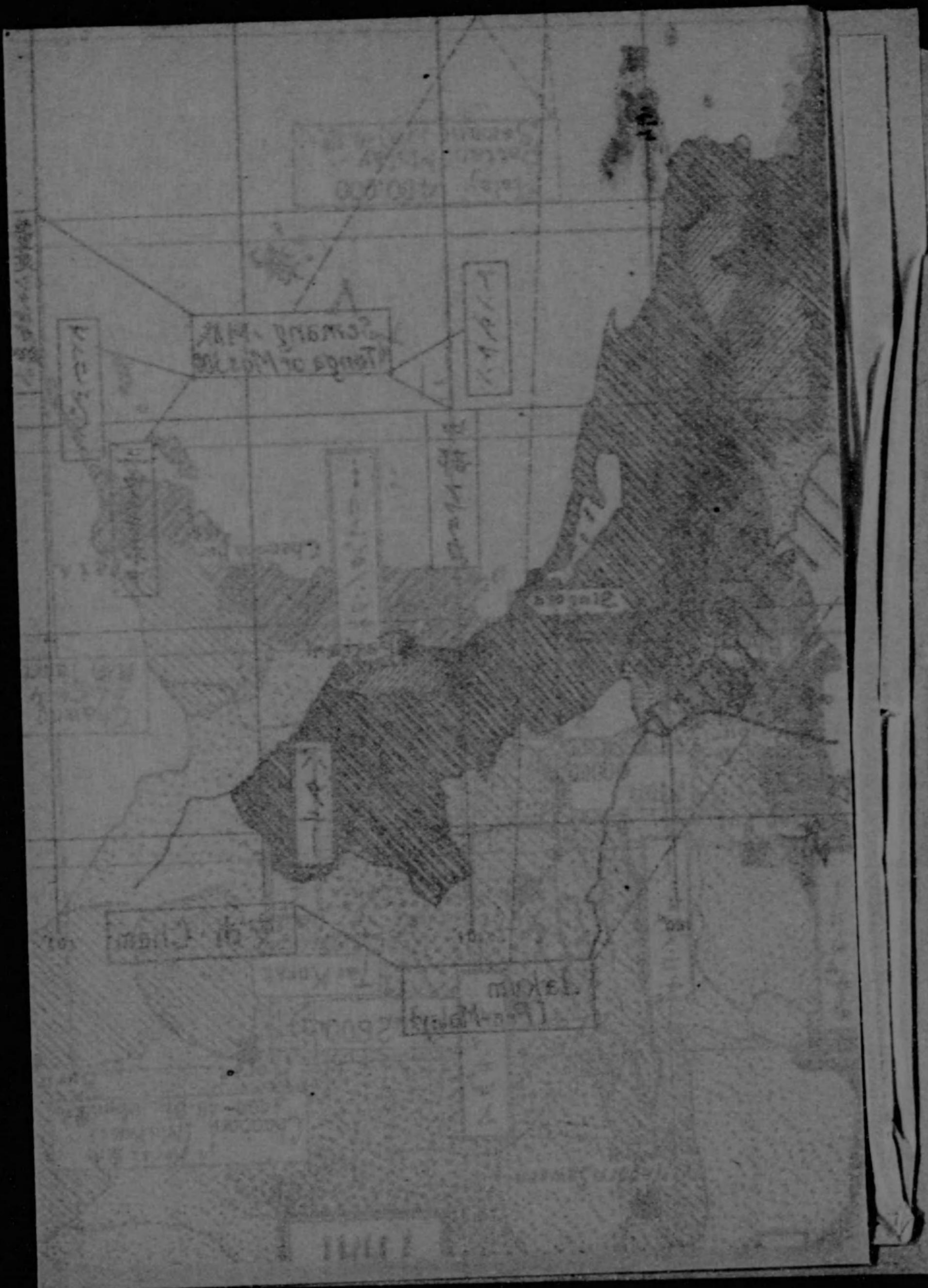
名稱——ピートンルアン Pt. Tawng Luang ともいふ。黄葉蠻民の意。

居住地——本族は最近の研究によりメーナムバーサク水源附近の山地及びプレーヤ、オーン縣の山中に少数住居することが判明した。

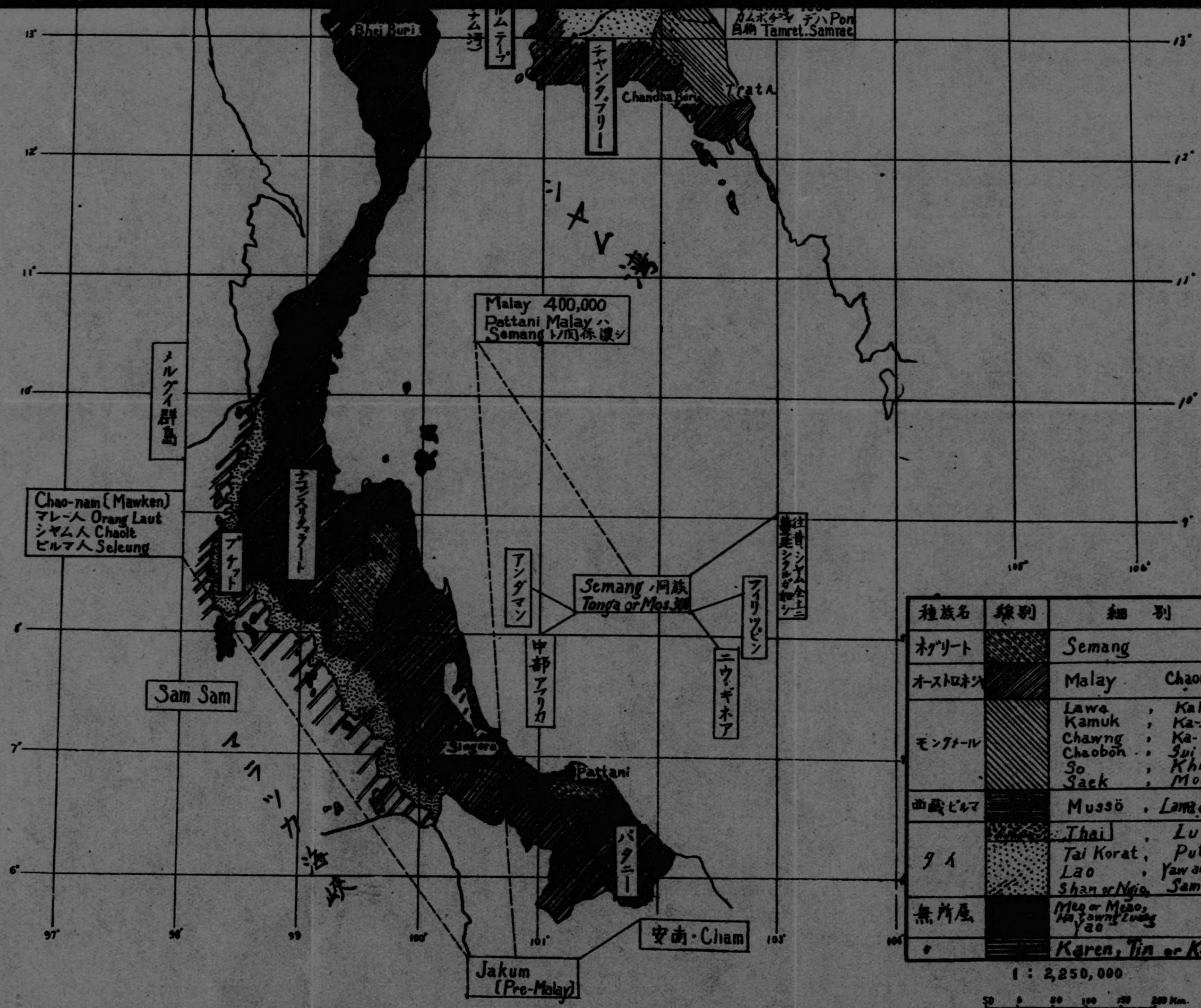
生活——最も原始的な状態にあり、男女ともに殆ど裸體で、栽培など何もしない。野の幸が彼等の生活の主なる糧であるが、時にラオ種族との物々交換によつて鹽、煙草、布帛を得る。甚だ臆病で種を滅多に見せない。

「黄葉民」とは、土地に葉のついた樹枝をつき立て、住居を作り、その葉が黄色になれば葉で去る風習あるによつて、かく名付けられたものであらう。

(終)







メルケイ群島
 Chao-nam (Mawken)
 マレー人 Orang Laut
 シヤム人 Chaolt
 ビルマ人 Seleung

Malay 400,000
 Pattani Malay
 Semang

Semang 同族
 Tonga or Mos

Sam Sam

Jakum
 (Pre-Malay)

種族名	線別	細別
ネグリート	[Pattern]	Semang
オーストロネシア	[Pattern]	Malay Chao-nam
モンテール	[Pattern]	Lawa, Kamuk, Chawng, Chaobon, So, Saek
西藏ビルマ	[Pattern]	Mussö, Lama of Kanbur
タイ	[Pattern]	Thai, Tai Korat, Lao, Shan or Ngao
無所属	[Pattern]	Miao or Meao, Mo, Sawng Luang, Yao
	[Pattern]	Karen, Tin or Katin

1 : 2,250,000
 50 100 150 200 Km.

917
223

製本控

917	函	223	號	年	月	日
泰心に方合ける諸氏 族に就て						
						冊
						備考

種別	種別	種別
26000	Malay	Chanson
Law Kamuk Cawng Chapok Kam Mion	Kalung Ka-Bang Ka-Ting Jui-Kui Kam Mion	
Musso	Lamp of Lampu	
Tan Lu Tai Khor Pulsi Lao Yan and Yau Sam Sam		
New Map 100		
Kan on Katin		



Handwritten text in the top left corner, including 'H', '4110', '30', and 'R'.

昭和十五年十月一日印刷本 (非賣品)
昭和十五年十月五日發行

東京市野區宮園通一ノ二七(小山方)

總發行所 和田義隆

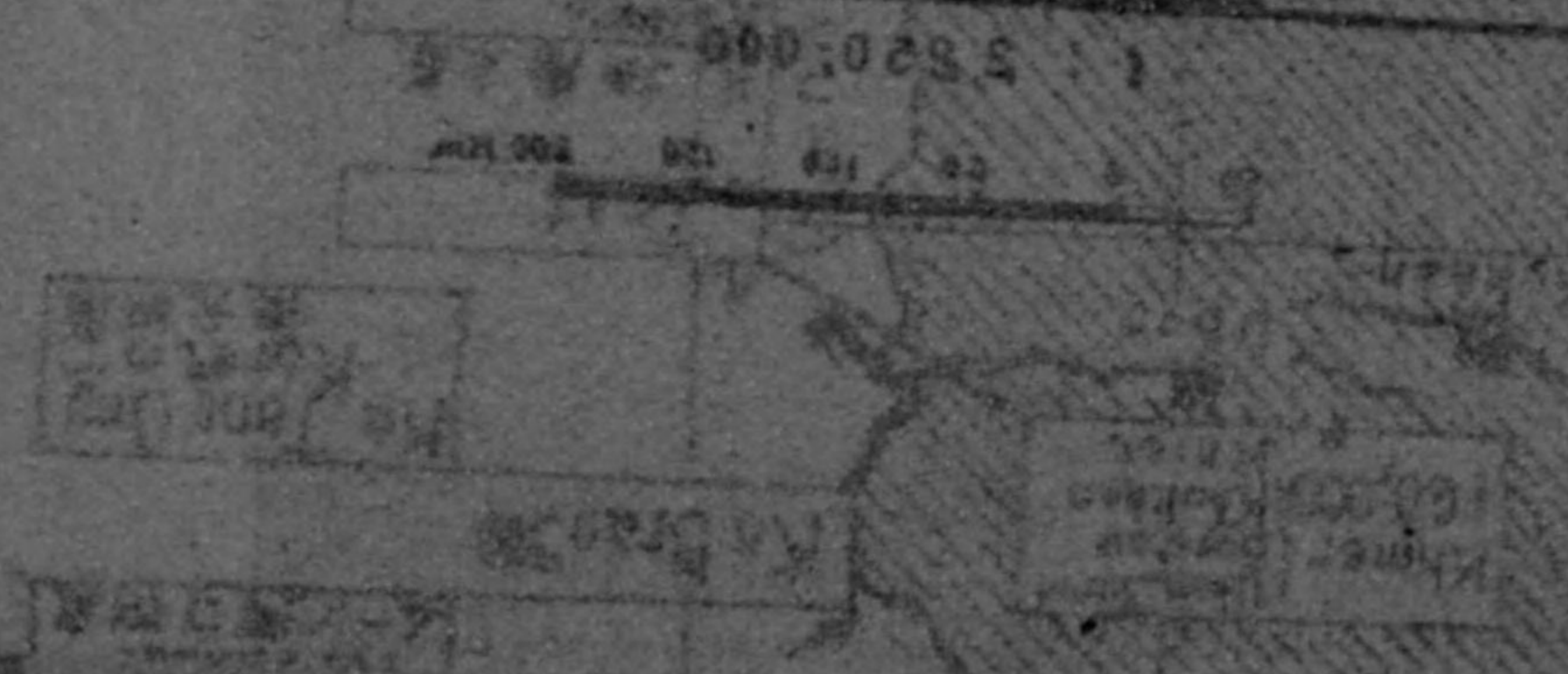
東京市芝區豊台町二丁目十四番地

印刷人 渡邊丑之助

東京市墨田區内幸町二丁目三番地(幸ビル内)

南洋經濟研究所

電話銀座(67)三五五六番



917
223

